

# スウェーデン就学前教育の領域「環境」の内容について

## —就学前学校改訂ナショナルカリキュラムと実際の見学を通して—

横井一之\*

スウェーデンの就学前学校ナショナルカリキュラムは1998年に制定されて2010年に改訂された。その内容を見ると目標は、一例をあげれば「自然についての科学性や関係性の理解を育て、また……（以下略）」のように子どもの視点ではなく、大人の視点、高等学校等の用語を用いて記述されている。実際に2018年8月に保育参観した就学前学校において、通訳兼ガイドは「保育園（通訳のまま）では、これらの活動を通じて数学、自然科学、物理、化学、生物、……を勉強する」と伝えた。これは、単に翻訳の問題でなく、スウェーデンの就学前学校が高等学校等の教科名で保育内容を論議することによる。スウェーデンの就学前学校はイタリアのレッジョ・エミリアの影響を受けているところが多く、そのプロジェクト活動を論じるときに、そこからどのような学びがあるかを考える場合、高等学校等の教科名を用いて論じた方が視点は定まりやすいかもしれない。ドキュメンテーションを書く場合も、読者は保護者なので、教科名の方が領域名を用いて論ずるよりなじみがあると思う。この論文では、領域「環境」の内容に焦点をあて、スウェーデンの就学前学校ではどのように捉えられているか日本と比較して論じる。

## 1. スウェーデンの就学前学校について

スウェーデンの教育制度は、野津2018によると表1に示したとおりで、就学前学校が日本の幼児教育施設にあたる。スウェーデンの保育は幼保一体・幼保一元で施設は就学前学校と呼ばれており、コミューン（地域共同体）による運営が89%を占めている。職員配置は、11名の子どもに2人の保育教諭・保育士の配置となっている。2006年度の統計では、1保育教諭・保育士に対して平均5.1名の子どもとなっている。以前受け入れていた0歳児保育は、現在保護者のいずれかが育児休暇を取る制度となった。すべての子どもが利用するわけではないので、保育料は低額だが徴収している。朝、8時までに登園した子どもには朝食が出る。昼は給食となっている。保育の実施義務はコミューンにあり、4か月以上の待機児童を出してはいけないことになっている。

日本の保育所保育指針にあたるものは「就学前学校カリキュラム」（ナショナルカリキュラム）であり、1998年、学校法に基づき制定され、2010年、同カリキュラムは改訂された。PISAによるスウェーデンの学力低下を背景として、2010年の改訂就学前学校ナショナルカリキュラムの「目標」では、言語やコミュニケーションする能力、数学、自然科学などを強調しており、遊びを通して学ぶという視点である。2018年の改訂では、教育の視点が強調された。

---

\* 東海学園大学教育学部教授

表1 スウェーデンの教育制度（元名古屋短期大学教授 野津 牧氏資料2018より）

	英語表記	期間（年齢）	備考
就学前学校	Preschool Activities	1～5歳	幼保一元
就学前クラス	Preschool class	6歳	2018年度より義務化
基礎学校Grundskola	Preschool class	6・7歳から15-16歳の9年間	小中一貫・8年生から成績評価
高等学校ギムナジウム	high school	3年間	高等学校（普通科）
		16歳～19歳	職業高校
大学	University	2～5年間	基礎レベル3年・発展レベル2年（修士）・保育教諭3年半
		4年間	大学院（博士課程）

## 2. ナショナルカリキュラム改訂版2010について

スウェーデンの就学前学校ナショナルカリキュラム（以後ナショナルカリキュラム）は、1998年に制定されて、2010年に改訂された。2章からなっており、第2章が「目標と指針」で第2節に具体的な保育内容の目標が記述してあり、日本の保育所保育指針および他の2法令の領域「環境」に該当するものは、以下の表2のとおりである。これらの目標は22項目あるが、筆者が便宜的に番号を付けた。

表2 スウェーデン就学前学校ナショナルカリキュラムの目標のうち日本の領域「環境」の内容に該当するもの（白石・水野2013 p 184-197、翻訳：瀬口巴オリビエール）

- ④自分が一つの文化に帰属していることを感じるとともに、他の文化に対する感受性や尊重の念を育てる。
  - ⑬空間、形、場所と方向性、量や位置、順序や数の概念、話し言葉の概念、そして計測、時間、変化についての基本的な資質を育てる。
  - ⑭自分や他者から提起された問題を、数学を使って、調べたり、話し合ったり、いろいろな解決策を試したりする能力を育てる。
  - ⑮数学的な概念を使ったり、識別したり、表現し、調べたりする能力、またそれに関連する能力を育てる。
  - ⑯論理に従って考えを進める数学的なスキルを育てる。
  - ⑰いろいろな自然のサイクルや、人間と自然と社会がどのように影響し合っているのかについての関心と理解を育てる。
  - ⑱自然についての科学や関係性の理解を育て、また、植物や動物、簡単な化学的作用や物理的現象の知識を培う。
  - ⑲自然科学について、問題を提起して話し合ったり、識別、調査したり、言語化する能力を育てる。
  - ⑳日常生活の中の工業技術に気づき、簡単な工業技術がどのように機能するかを探求する能力を育てる。
  - ㉑いろいろな材料や道具、技術を用いて、組み立て、創造し、構成する能力を発展させる。
- ⑧～⑩、㉒は2010年の改訂版以後取り入れられた項目

## 3. スウェーデンの保育内容と日本の領域「環境」

日本の幼児教育施設は幼稚園、保育所、認定こども園がある。各々幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領にしたがい、順に教育課程、全体的な計画、全体的な計画を作成する。これらの保育所保育指針などは2018年度から改訂（改定）版が用いられている。領域「環境」の内容12項目、表2ナショナルカリキュラムの目標関連項目を表3に並記した。保育所保育指針では、(1)のような（ ）数字でなく、①のような○数字が用いられているが、幼稚園教育要領に用いられている（ ）

数字で表した。ナショナルカリキュラムが○数字を用いているので、それらと区別する意味もある。

上記保育所保育指針などの領域「環境」の12番目の項目は、「幼稚園内外の行事において、……」、「幼保連携型認定こども園内外の行事において、……」と最初の幼児教育施設名がそれぞれ入れ替わる。それ以外の文面はすべて同じである。このことは、2018年の幼児教育3法令の改訂（改定）の注目点でもある。ただし、3法令の対象年齢が一致するのは3歳以上のみなので、3歳以上の文言が一致するということだ。

日本とスウェーデンでおよそ内容が一致するものを並べたが、(2)と⑳、㉑は「物に興味をもつ、その能力を高める」ということで共通する。(4)と㉑は自然とのかかわりを捉えているが、スウェーデンの就学前教育見学时も、ESDが話題となっていた。(5)と㉑から、動物や植物はどこ国においても子どもの遊び相手になることが分かる。動物や植物と遊んだり関わりながら、子どもは生きていくために必要な技術や知識を身に付ける。(6)と④は2018年から日本では新しく入った項目である。スウェーデンは難民の流入も多く、野津2018によると、移民対策として「就学前教育では、スウェーデン語を母語としない子どもに対する支援では、基礎学校のように入学後に基礎クラスにおいてスウェーデン語の習得を経て通常のクラスに移る方式は取らず、保護者に対する通訳支援をコミューンが整えている（電話での通訳制度もある。）また、バイリンガルの保育教諭も多いことから差があるものの、対応できる言語も多い。同時に、子どものアイデンティティは生まれた国にあるとして、図書館には30か国程度の母国語の本・絵本が置いてある。」という。

(8)と㉑は興味をもったものや事象に主体的に関わっていくことの大切さを述べている。(9)と⑬、⑭、⑮、⑯は数量・図形の指導について述べている。

表3 ナショナルカリキュラムと領域「環境」(2018)との対照表

保育所保育指針 領域「環境」の内容	ナショナルカリキュラム (2010改訂版) (一部記述)
(1) 自然に触れて生活し、その大きさ、美しさ、不思議さなどに気付く。	
(2) 生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心をもつ。	⑳日常生活の中の工業技術に気づき、簡単な工業技術がどのように機能するかを探求する能力を育てる。 ㉑いろいろな材料や道具、技術を用いて、組み立て、創造し、構成する能力を発展させる。
(3) 季節により自然や人間の生活に変化のあることに気付く。	
(4) 自然などの身近な事象に関心をもち、取り入れて遊ぶ。	㉑いろいろな自然のサイクルや、人間と自然と社会がどのように影響し合っているのかについての関心と理解を育てる。
(5) 身近な動植物に親しみをもって接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする。	㉑自然についての科学や関係性の理解を育て、また、植物や動物、簡単な化学的作用や物理的現象の知識を培う。
(6) 日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ。	④自分が一つの文化に帰属していることを感じるとともに、他の文化に対する感受性や尊重の念を育てる。
(7) 身近な物を大切にする。	
(8) 身近な物や遊具に興味をもって関わり、自分なりに比べたり、関連付けたりしながら考えたり、試したりして工夫して遊ぶ。	㉑自然科学について、問題を提起して話し合ったり、識別、調査したり、言語化する能力を育てる。
(9) 日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ。	⑬空間、形、場所と方向性、量や位置、順序や数の概念、話し言葉の概念、そして計測、時間、変化についての基本的な資質を育てる。 ⑭自分や他者から提起された問題を、数学を使って、調べたり、話し合ったり、いろいろな解決策を試したりする能力を育てる。

	⑮数学的な概念を使ったり、識別したり、表現し、調べたりする能力、またそれに関連する能力を育てる。 ⑯論理に従って考えを進める数学的なスキルを育てる。
(10) 日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ。	
(11) 生活に関係の深い情報や施設などに興味や関心をもつ。	
(12) 保育所内外の行事において国旗に親しむ。	

日本でのみ取りあげている項目は、(1) (3) (7) (10) (11) (12) である。(1) について、スウェーデンでは自然と人は別々のものではなく、一体化したものという感じを受けた。首都ストックホルム市でも就学前学校のすぐ隣に豊かな木々があり、あえて言えば森と呼ぶが、学校から出れば森があり、それを幼稚園と呼べば、「森の幼稚園」はいつも極身近かにあると言える。このことは、ガイド兼通訳をして下さった佐々木さんに「スウェーデンの森の幼稚園が日本では有名ですが、国内には多くあるのですか？」と尋ねたところ、佐々木さんからは「スウェーデンでは森は特殊なものではなく、どこでもあります。スウェーデン中が森です。実際に森に入って保育を行っているところもあります。ムッレが登場するところもあれば、わざわざ森の幼稚園と呼ばないところもたくさんあります。」という返答を得た。(3) について、スウェーデンでは夏は涼しく、冬も乾燥していてさほど雪は降らないという。少し緯度が足りないので、ストックホルムでは白夜や極夜になることはないという。四季の感じ方が日本とは若干違うのかもしれない。今後研究する機会を待ちたい。(7) について、ナショナルカリキュラムの第1章「就学前学校の価値観の基礎と任務」に「(人に対する) 理解とおもいやり」「客観性と多面性」が示されている。人を大切にすることが掲げられている。当然、物を大切にすることは当たり前だろうか。(10) について、就学前学校の見学において、丸いじゅうたんがあり子どもがそのまわりに集まるが、1～3歳児クラスでは子どもの顔が貼ってあった。4～5歳児クラスでは名前が書いてあった。ナショナルカリキュラムに明記はないが、指導は日常的に行われている。(11) について、前述のように就学前学校が基礎学校の隣にあたり、その間に森があたりする。日常生活の中で施設や情報に触れ合うのは極当たり前である。しかし、ナショナルカリキュラムには明記されていない。(12) について、スウェーデン人は国、コミュニティ、人をととても大切にする。ストックホルム市の隣のサーレム市を訪問したときは、Lennart Kalderen 市長自らが市役所玄関で迎えて下さった。そして、掲揚塔に目をやるとスウェーデン国旗と日の丸がはためいていた。この日のために、日の丸を用意して下さったということだ。

#### 4. テーマ（プロジェクト）活動について

プロジェクト活動とその評価ドキュメンテーションはイタリアのレッジョ・エミリアの発祥という。1981年ストックホルムで第1回、1986年に同じく第2回のレッジョ・エミリアの展覧会が開かれ、「子どもを有能で豊かな可能性を持つ存在ととらえる教育法を学んだ」（白石・水野2013）という。現在では、レッジョ・エミリア・スウェーデン研究所がその研究を担い、スウェーデンの伝統的な保育の上に、新たな実践方法を創造している。

表4 実践例「園庭の馬の遊具」(白石・水野2013 p 86-113)

<p>テーマ活動 園庭の馬の遊具</p> <p>(1) 保育者たちが活動の方向性を話し合う</p> <p>(2) 子どもたちの外遊びへの興味・関心を調べる 園庭や森を歩きながら、そこでする遊びについて話す。みんなで集まって、振り返りをする。</p> <p>(3) グループごとに希望の遊具のモデルをつくる 一人ひとりの考えを発表し、グループをつくる。グループごとにモデルを作る。「馬」のモデルを作る。「洞穴のある山」のモデルを作る。「ブランコ」のモデルを作る。「船」のモデルを作る。「橋」のモデルを作る。「塔」のモデルを作る。</p> <p>(4) 中間のまとめ 六つのモデルの完成。保育者のリフレクション。保育者は次の活動の準備を進める。</p> <p>(5) 園庭に馬の遊具を作る 馬に貼り付けるタイル作り。アーティストの馬作りを見守る。馬の完成を祝いパーティーを開く。馬の遊具の制作過程を振り返る。一人ひとりが粘土で馬を作る。馬の遊具をスケッチする。</p> <p>(6) 全体の評価 子どもたちがより多く学んだことは何か？ 子どもたちの育ちや学び（カリキュラムの指針に照らして）。保育者が改善すべきこと、今後の課題。思い出のボードを作る。</p>
---

## (2) テーマ活動とは

スウェーデンの就学前学校で行われているプロジェクト活動をテーマ活動という。生活の中からテーマを取り上げ、子どもと保育者が一緒に探求し、造形表現や、ファンタジーの遊びに発展していく活動をテーマ活動と呼ぶ。

実際のテーマ活動として、白石・水野2013は表4のような実践例を示している。

## (2) 実際に見学して

①見学日時 2018年8月23日(木) 13:30～14:45

②見学学校 スウェーデン、ストックホルム県サーレム市立ソールグレンタン就学前学校

1～3歳児の棟を参観させていただいたが、壁面にPROJEKTという文字の下に大きなクモが掲げられていた。これが、表4最終行の「思い出のボード」だろう。

図1は子どもが描いたクモの絵、クモの造形、左側は活動の様子、そしていろいろの昆虫を説明している額縁がある。図2は上部には子どもの作品が掲げられ、中央には実際の子どもの活動がその様子を写した写真と一緒に示してある。



図1 子どもが描いたクモの絵、クモの造形、昆虫の写真



図2 子どもの作品、作業の説明



図3 クモ飼育の水槽



図4 プロジェクト活動 思い出のボードとクモ作品

図3は子どもが捕まえたクモを水槽で実際に飼育しているところである。図4は思い出ボードである。手前には子どもが製作したクモが吊るしてある。地が茶色で、青で重ね塗りしてある。足が片側4本あり、観察がきちんと出来ている。ボードの左中ごろには、木板の上に釘を数本打ちつけ、釘の頭どうしを毛糸でつなぎ、クモの巣の様にした造形物がある。ほかの場所の掲示には、クモの目の拡大写真もあるが、それらは保育者が撮影したものである。

## 5. ドキュメンテーションについて

### (1) ドキュメンテーションとは

白石・水野2013 p 63によると、ドキュメンテーションは、子どものテーマ活動のプロセスを、保育者が子どもの言葉を書き留めたり活動の写真を撮ったり、省察を加えた文書のことだ。ドキュメンテーション作成は保育者の主要な仕事であり、子ども理解を深めたり、自分の実践を振り返ったり、向上させる機会となる。保育改善の資料になるし、子どもと保護者、保育者の三者をつなぐ役割を果たす。

表4に事例「園庭の馬の遊具」を示したが、この表を読むとどんな活動をしたのかがおよそ分かる。

この表を詳しく書いてまとめたものがテーマ（プロジェクト）活動のドキュメンテーションとなる。

### (2) ドキュメンテーションの実際

各保育棟の一角にそれぞれの子どもの日ごろの保育の様子について写真や作品、保育者の記述をまとめた図5のようなドキュメンテーションが立ててある。保育者以外には「本人と保護者のみ」が閲覧可能だそう。保護者はこれを見ることにより、子どもの日ごろの様子、成長を知ることができる。見学のときに園長先生に確認すればよかったが、テーマ（プロジェクト）活動のドキュメンテーションは、基本的に保育者も含めたグループで行うものなので、保育室全体に掲示したり、最後に作製する「思い出のボード」もドキュメンテーションの1つということだろう。図5のような個人のドキュメンテーションは、想像すれば「7月23日（月）T（子どもの名前）は、昨日お父さんと一緒に捕まえたと言って、体長1.4cmの背中が赤いクモを持参した。毒グモではないかということで、すでにお父さんがスプレーをかけて殺したということだった。鮮やかな赤いクモということで、登園当初は子どもたちがクモに群がり人だかりができていた。」などと記入すると思われる。時間的な余裕があり、保育者が必要と判断すれば、それを写真撮影



図5 保育室の中の個人向けドキュメンテーション

して残す。図5の下段のファイルの背表紙には、1～3歳児クラスなので子どもの顔の写真が貼ってある。  
(3) 事例のドキュメンテーションの中の「子どもたちの育ちや学び」(カリキュラムの指針に照らして)

表4のテーマ(プロジェクト)活動のドキュメンテーションの中に、カリキュラム上の評価が記入してあったので、ここに示したい。評価は○創造/表現、○数学/自然科学、○言葉/コミュニケーションと記述してあるが、ここでは領域「環境」に関すること、つまり2番目の○数学/自然科学について表5に示す。

表5 テーマ(プロジェクト)活動「園庭の馬の遊具」における数学/自然科学の視点からの評価

- |   |
|---|
| <p>○創造/表現(略)</p> <p>○数学/自然科学</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・遊具のモデルを作るグループワークでは、数える、長さを計る、形を認識する、長さや形を調整するなどの能力を積極的に用いた。</li> <li>・馬の形態的特徴や食べ物について関心を持って調べたり、観察した。</li> </ul> <p>○言葉/コミュニケーション(略)</p> |
|---|

研修中、スウェーデン国内で本物の馬を見た。1つは、2019年のNHK大河ドラマは中村勘九郎演ずる金栗四三(かなくり・しそう)が登場する「日本で初めてオリンピックに参加した男」だそうだが、その撮影現場に登場した馬車を引っ張っていた。2つは、非常に珍しいことだがストックホルムを発つ8月25日(土)に、ネオナチ系政党により数十年ぶりにデモ行進が行われたが、それを警備するホースガードが出動していた。バス通りにお尻を向けて、デモ隊が通る間彼らを守っていた。どちらも、馬が立ち去った後には馬糞が残されていた。かなりの頻度で排出するものらしい。実際に馬を扱ったら、この点に触れるのも意義があるかもしれない。上記評価には、この項目はなかった。

これは筆者からの願いだが、馬を扱ったら是非「力」について子どもが理解を深めることができるようにしてほしい。力と筋肉は関係がある。馬は筋骨隆々である。あの筋肉が力の源泉である。現代的な課題とすれば、馬が自動車に代わっていったことについても触れて欲しい。筆者が見学した事例は対象が1～3歳だが、表4の「園庭の馬の遊具」の事例は4歳児プロモネット組20名(保育者3名)が対象である。

## 6. 考察

スウェーデンでは2018年から小学校へ行く前の1年間「就学前クラス」が義務化されるとともに無償化された。以後、大学院に至るまで授業料は無料である。高納税高福祉国家の制度による。かつては幼稚園

表6 考察の要旨

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"> <li>1. テーマ(プロジェクト)活動に、保育者(保育教諭と保育士)は子どもと共同活動者として参加する。よって、その教育的意義を論ずるときは、子どもと保育者共通の教科概念(意味)が必要である。スウェーデンでは、幼児でも高校レベルの教科名を用いるのでこの点は問題がない。これもレッジョ・エミリアの影響かどうか確認が必要だ。</li> <li>2. 一方、食事とか排泄指導など、いわゆる基本的な生活習慣の指導はきちんと行われている。テーマ活動が教育とすると、これらの指導は養護である。スウェーデンではテーマ活動と生活の指導のバランスが取れている。</li> <li>3. スウェーデンと日本の気候を比べるとかなり異なる。領域「環境」の立場から、季節観の差異について今後研究の必要を感じる。</li> </ol> |
|---|

と保育所に分かれていた幼児教育施設も、1996年に教育省学校庁管轄の就学前学校に一体化された。それに伴い、1998年就学前学校ナショナルカリキュラムが制定され、2010年に改訂され、2018年に少し改訂された。2010年の改訂では、その目標に「遊びを通した学び」を行い具体的な目標が明記された。本稿では、その目標と日本で2018年に改訂（改定）された幼児教育3法令の領域「環境」の3歳以上の項目を比較した。特記すべきは、日本の項目（3）「季節により……」の「季節」で、スウェーデンと日本の季節感はかなり差があることが推察される。2018年日本の夏は記録的に暑かった。夏の日本の子どもの活動の中心は水遊びである。きっと今年は心から満足して水に入ったことだろう。しかし、8月22日、23日の両日スウェーデンの就学前学校を訪問したが、水遊びはしてなかった。気温は24℃ぐらいだったと思う。以上のことを踏まえ、今後両国の季節感の差異を研究する必要があると感じた。

表3のナショナルカリキュラムの目標を見たとき、第一に感じたことは「工業技術」、「構成する能力」、「自然のサイクル」、「化学的作用」、「尊重の念」、「自然科学」、「順序や数の概念」、「数学的スキル」など子どもにとっては難しい言葉が多いということだ。このことは、8月22日（水）午後スウェーデン最初の見学地ポーフォゲルン就学前学校でのことでわかる。保育室を見学しながらガイド兼通訳の佐々木さんから説明を受けていた時のことである。同行の研修者Uさん（大学研究者）から、「幼児なのに、科学とか物理、化学という領域名とか学ぶ内容を呼ぶんですか。」と質問があった。逆に佐々木さんから「花や野菜は植物、恐竜は生物の勉強じゃないですか？」と質問がでた。「だから、日本では領域で扱っていて、生物なら領域「環境」で……」と小論争が始まった。が、佐々木さんから「花や恐竜は、生物でいいでしょう！何かあるんですか。」筆者は、単純にガイドさんの日本語で用いる用語の問題だと思っていた。領域「環境」という用語は知らないのだと思っていた。スウェーデンの幼児教育の専門家は、保育内容を論じるときに領域「環境」のような用語を用いるとこの時まで思っていた。がしかし、帰国してこの表2を何度も読み返すにしたいが、「スウェーデンでは、ナショナルカリキュラムでも特に幼児独特な教科名、領域名を用いずに、高校レベルのというより、一般的な教科名を用いて保育を語ること」が理解できてきた。

ところで、研修では市長さんにお世話になったサーレム市役所の会議室をお借りして、8月22日（水）午前中にソーデルトーン大学のアンドレア先生から、「スウェーデンにおける保育士養成」の講義を1時間伺った。その後の昼食会で同行の理科教育の先生がアンドレア先生と研究分野が同じということで資料を送りあうということで意気投合した。そこで、メールや郵便のやり取りでは間違いがあるといけないと思い、2日後24日14時にメールでご承諾を得たうえで大学を訪問した。アンドレア先生は保育士養成学部のリーダーと聞いていたので、先生の研究室を訪れると図工をする学生、音楽を奏でる学生の姿を目に思っていた。がしかし、紹介されたのは生物部門の男性教師3名であった。彼女も、大学院の専攻は分子生物学で、この生物部門（branch）に所属するという。伺った話を総合すると、ソーデルトーン大学には生物、物理、数学など29のbranchesがあり、生物部門はその1つである。そして、各部門から選抜して保育教諭養成委員会を設置している。要請があったのでその保育教諭養成委員会委員長のアンドレアさんが講演なさった。確認ができなかったが、他の委員はどの部門に所属するか、可能性としてはスウェーデン語部門、数学部門とか他部門からも委員が集まっていると考えられた。生物の道を究めたものは幼児にも生物のことを教えることができる。これはブルーナ仮説である。スウェーデンでは、ごく普通に捉えていると感じた。

さて、テーマ（プロジェクト）活動を行うとき、保育者は指導者でなく共同活動者になるという。子どもと論議するとき、用いる教科のカテゴリーが一致していた方が話はスムーズに進む。こう考えたとき、ガイド兼通訳の佐々木さんが「幼児の保育内容を語る時に、科学とか、生物とか、物理という子どもには難しい用語を使っても良い」とおっしゃった意味が理解できた。おそらく保育論を展開するときは、「幼児期特有の」物理学とか、「幼児期特有の」数学というように、問題点を回避する方法が何かあると思う



のだが、今回の見学では分からなかった。さらに研究を深めていきたい。

一方、保育所保育指針という養護についてはどのように実施されているかを見学した。教育の中心がテーマ（プロジェクト）活動だとすると、日常生活習慣の指導や養護の指導はどうかというと、当然であるが、午睡もあったし、排泄指導、食事指導、絵の具がついたときはぬぐうなど「清潔」の指導もなされていた。着脱衣指導を直接は見なかったが、登園着の上にスモック様の上着を着ていたの、登降園時にはこの指導がなされているものと推察した。このように、テーマ活動と日常の指導が、保育所保育指針という教育と養護にタイアップしていると考えられる。

以上、参考文献からの事例、実際の見学を通して、日本の幼児教育施設での領域「環境」の保育内容およびその領域名、スウェーデンの就学前学校ナショナルカリキュラムでの関連内容とその呼び名、教科名を中心にして取り上げた。スウェーデンと日本は、同じく幼稚園、保育所に二元化していた時期もあるが、スウェーデンは一体化を済まし、また、政治体制は同じ資本主義でも、税率、社会福祉体制、保育制度等に差異がある。

最後となりましたが、スウェーデン訪問時に講義いただきました先生方、サーレム市長様、保育参観させていただいた就学前学校の子ども、保護者各位、保育教諭、保育士その他の方々へ、紙面を借りてお礼を申し上げます。

ありがとうございました。Tack så mycket. (タク ソ ミッケッ)

## <参考文献>

- 大野 歩2015「スウェーデンの保育改革にみる就学前教育の動向—保育制度と『福祉国家』としてのヴィジョンとの関係から—」『保育学研究』第53巻第2号, 110-125
- 白石淑江2017「スウェーデン王国」泉 千勢編『なぜ世界の幼児教育・保育を学ぶのか』65-101. ミネルヴァ書房
- 白石淑江・水野恵子2013『スウェーデン 保育の今—テーマ活動とドキュメンテーション—』かもがわ出版
- 鶴 宏史2004<翻訳>「スウェーデンのカリキュラム OECD」“Five Curriculum Outlines-Starting Strong Curriculum and Pedagogies in Early Childhood Education and Care”『社会問題研究』第57巻2号, 179-187
- 野津 牧2018「スウェーデン・フィンランド 保育・幼児教育研修報告書」(未刊行)
- 山本理絵2017「小学校への移行期の生活と保育・教育方法に関する一考察—スウェーデンにおける教育ドキュメンテーションとプロジェクト活動の調査から—」『人間発達学研究』第8号, 71-87
- リンドグレーン2006『長くつ下のピッピ』岩波書店